

神直子さん

ブリッジ・フォー・ピース代表

戦争を直視することですが、平和は見えてこない

元日本兵とフィリピンの戦争犠牲者を、互いのビデオメッセージでつなぐ試みから出発し、現在では戦争のない社会の実現を模索する活動に取り組むBFP（ブリッジ・フォー・ピース）。「もはや戦後ではない」と言われたのは五十年前だが、戦争の傷痕に苦しむ人たちはまだまだ多数いる。現状をどう捉え、どんな未来を願うのか。代表の神直子さんに話を聞いた。

自分に何ができるのか？

— 神さんはもともと、戦争について知りたいという思いが強かったのですか？

学生時代は自分と過去の戦争に関わりがあるとは、ほとんど思っていないませんでした（笑）。年号の暗記が多い日本史もどちらかというと苦手で、自分と日本の歴史とのつながりを意識できずにいましたね。

高校時代、留学先のイギリスで、いろいろな国からの留学生と出会ったのですが、ドイツ人の女の子が

「ナチスドイツのしたことを思うと、ドイツ人だと思われたくない」と言ったんです。同じ歳なのに、自分の国の否定的な側面というか、負の歴史を知ったうえで自らの思いを語る彼女と、歴史を知ろうともせず「日本史嫌い」とかこっけてきた自分とのギャップに驚きました。以来、歴史の問題を自分のこととして受けとめるにはどうすればいいのかという思いが、つねに頭の片隅にありましたね。

大学生のとき、友人に勧められて、フィリピンで戦争の傷痕を知るためのスタディツアーに参加し、戦争被害者の方と対面しました。そのとき強く感じたのが、

「自分は日本人なのだ」ということです。戦後世代などということは関係なく、被害者から見れば、私はまざりもなく「自分たちの土地で戦争をした日本人の血を引く子孫」なのです。このとき出会った女性は、結婚した翌年に夫が日本軍に連行され、どこでどうなったのか、まったくわからないと言っていました。こんな話を聞いたところで果たして自分に何ができるのか、当然のことですが、当時はまるでわからない（笑）。

人づてに「戦争での自分の加害行為を悔みながら亡



●じん・なおこ 一九七八年大阪生まれ。一般企業、NPO勤務を経て、二〇〇四年にブリッジ・フォー・ピースを立ち上げ、現在、代表理事。共著に『私たちが戦後の責任を受けとめる30の視点』『未来の入会』『コミュニティ・コモン』市民がつくる地域力拠点「街を元気にする事例103」などがある。

くなった元日本兵がいる」という話を聞いたのは、社会人になってからです。終戦から六十年近くも経つというのに、いまだにそうした苦しみや苛まれている人がいることに、やりきれなさを感じましたね。日本兵の多くは、自分の意志ではなく、「お国のために」と自分を納得させての出征だったにもかかわらずですら。

日本人に対して怒りを持っているフィリピンの人たちに、元日本兵の苦悩や謝罪の気持ちをもまく伝えることができたなら——。そんなふうを考えて思いついたのが、ビデオで撮影した元日本兵たちの映像と証言を、フィリピンの人たちに直接届けるという試みでした。

戦争を語る「場」の必要性

— 神さんのように若い人が「戦争体験を聞きたい」と言つと、びっくりしたり、難色を示したりする人もいるのでは？

私の年齢や活動の背景を聞いて断る人もいたのですが、手紙などでやりとりするうちに、ほとんどのケースで話を聞くことができました。大概の人が、一度は